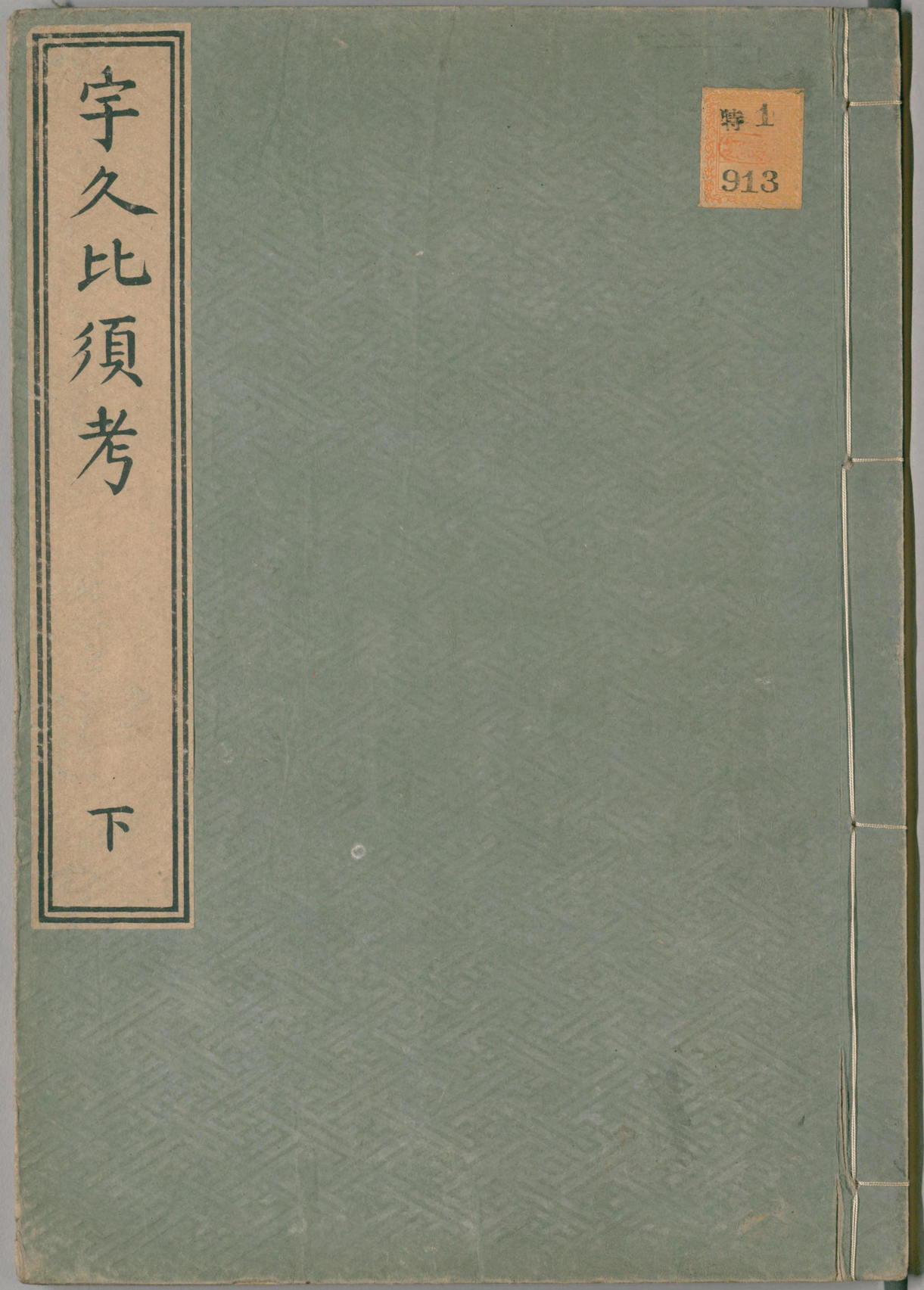
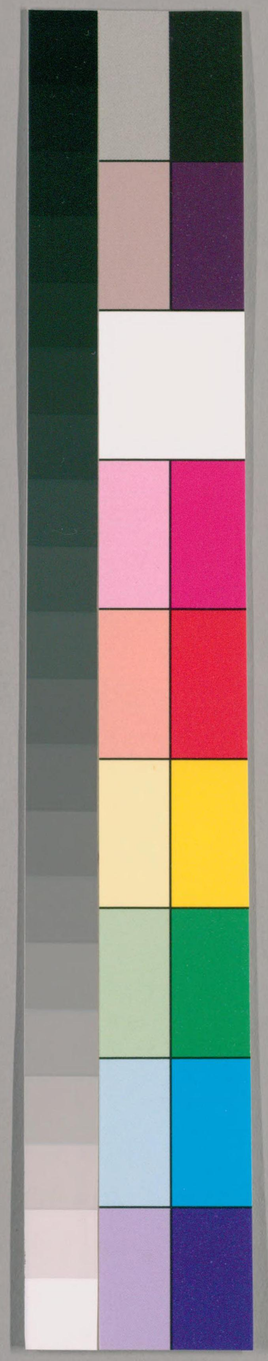




国立国会図書館　タイトル『宇久比須考 2巻』 請求記号 特1-913

ガラス使用

特1-913

宇久比須考巻之下

千葉直胤著

日井氏藏書

○宇久比須のかひこの中の杜鵑の説

萬葉集巻九曰鸎之生卵乃中爾霍公鳥獨所生而已父爾似而者不鳴已母爾似而者不鳴下畧○無名抄巻上曰郭公は鶯のこゝいふことハ万葉集に所々よめりはなりけるまゝにて有しを時助と中右舞人の故帥大納言のもとにまゐりてきそ語しけるとなりけるとハかの大納言きゝのごとて ぬみは捨ちに事せぬものなりけりと候しか時助が弟子なりけるに舞人の家のそのふにゐるとけるたまゝに鶯の巣はくひてあをうゐたりけれが屋ゝ出立程になりて一門のこのことは外に

国立国会図書館　タイトル『宇久比須考 2巻』 請求記号 特1-913　ガラス使用

大なになりてもはにもいらぬほどよなりにくるまバ常に外の竹の枝
ふゐてさんがに母の鶯のむしなくそんくれバおほ口をあなて喰
くるなり見て時助まかれことこそ侍ましと申け積ぐさかるまて見
けまじぐほとくござすとふて聲ぐりるを啼て御うるまけると申し
殘法子どもハうぐひすとなれはくおのくまかりにけれとかや
○江談抄卷三曰万葉集云藍縷鳥者鶯子也昔人
宅之樹蔭造巣生子漸生長之頃近臨見之自鶯頗
大鳥毛漸具舐其羽即奇思之間保止止岐須鳴太
畢云云○歌林良材集曰今の世にもまれくうぐひすの
巣よりも郭公のこなを得ることあれそのなるを
直胤按ずれに本草綱目卷四十九曰時珍曰杜鵑

不能為巣居他巣生子云ことあるまバ鶯の巣にも卵なし
うゑるなるんかくてハうぐひすに似てるとなるなれしも
あらじかし

○うぐひすの名義

古今集卷十曰物名うぐひす藤原敏行朝臣ちろから
花の雫にそぐちはうぐひすとおこ鳥の鳴らん○拾玉集
卷四曰くらしかはつうれ身の末なりふ空になるうぐひすと
鳥ぬなくなれ○拾遺愚草卷上曰うぐひすとなるはる
とりや春こゑとめぐむまが名も人にしたるまる○夫木抄卷二
曰承暦二年殿上歌合前中納言匡房卿いかなれバ春
くるかうにうぐひすのおのまが名をぞ人にはぐらせ○古今

集餘材抄巻十一曰物名うぐひすを藤原敏行朝臣心から
云々六帖にも貫之の歌とは只此集に依べし宇ぐひすとのことハ
猒不于とのことなり鳥とも或注に諸鳥也とあるまで是も鶯也
次はうこ郭公の心ばよみるに准らふべし花の雫にそぼつ□を
さらばうらにくことを有ばうぐひぬことく花の雫のしひてぬらすを
らんやうに恨ミがれに鳴らんよとなりしるなに承暦二年殿上
歌合に前中納言匡房卿いかなるまで春くるなどにうぐひは
のおのれが名とバ人に告らむ文治三年百首に中納言定家
卿うぐひすとなれはる鳥や春来ぬとぬぐむしが名も人にしら
もるに是等はれのが名をやがて鳴せよ思れられたるしこの
敏行の心得やうせられるなるや切聲に鳴時ゆくと聞ゆる

はせゆくとなくとハよみたれ常にはは法華経を囀ると俗に
いひなしてげにもさは聞ゆるをといかなるうぐひすをおのが
名のやうに鳴侍るはりひがこれ事なるを
直胤按ずるに契沖の説おぼやかなりたやくおのまもしろ
思へりなるを敏行朝臣がうたにうぐひすと濁まて點付
せる本もあるしかれおぼゆ云とくとなくといへれもさハまこえ
ねどたの事をぬるくより人うたがたまて本朝食鑑和漢
三才圖會ともにたけ後寶法華経或ハ日月星月星日など
なくよしいへまでおのれにハ契沖がいへるごとほけ経とのミ聞ゆなり
凡うぐひすとハまづ年の内より春の始めにハさく鳴とてチヨツくと鳴さて
日のうらになりゆくに従ひてく舌よくまたり聲そのひこゆ

ホウ引ホケキヨともホウ引ロホロ〳〵ホロホケキヨともなく〳〵やうに
きなゐまゝ春の末にかゝるゝ夏ゝをてハホロ〳〵キツチヨ〳〵
キツチヨ〳〵となくことにかゝるゝ物まゝ〳〵おのまゝが耳にはウグヒス
ともヒトクヒも聞とれぞ志るゝにかまゝ〳〵ふれくゝるゝいへるなり
おもへバ名義ハまゝなち鳴音よるゝ出しものゝなるゝほとく
ぎにれそぐひもやたとへば宇津保物語嵯峨院三ノ
児乃うぬ聲といかゝとなくゝ載寶物集巻上にあり
子のさゝじめくなくゝなくゝ志るくがなくゝ也いふなり来也
志るゝ物ゝかうこさく人乃ちゝ詠ぐゝりこゝあさるぐゝるゝ
たゝゐまゝぐうぐひもゝ宇久比須となくとおもひてきつバ
きゝこゝじゝもいひがゝし慈鎮もしるゝ物ゝとハよみたり契沖は

俊頼にその無名抄をや忘まにかむ其さゝ物しかの書にハ
うぐひもゝ鳴にるよし後かまゝれバ一証なれ爲し（無名抄をうぐ）
ひもゝのうひこの條に引ゝ併見ゝ是このまおもふ篤信君美真淵信景など
考へいへるなり（此四人の説次のくぐりに悉く引ゝり合せ考ふべし）くゝぬまゝバ名義を聲より出し
といへんかゝこまゝれ爲まゝ
日本釋名巻中曰報春鳥うくゝおくなりおとうと通ぜ
ひもゝいぜ也相通ずおくいづなり春ハ谷のおくよりいぜるな
るのなり幽谷をいぞく喬木にうはなるゝ鶯の字うぐひもゝと訓ぜ
まゝぐもしるのなり
故友人金田正方いへらく此説いかゞ凡詞あても物の名にて
をロ行のウヲの通ふハるのを見ゆまでア行のウオの通へる

例をしらばウヲは兎（ウサキ ヲサキ）白朮（ウケラ ヲケラ）現（ウツヽ ヲツヽ）などの類なりヒとイヰ通ふもおぼえどおほよそ五音相通とハいへど通へるは いと少し證とせんは例によるべきわざなるさきく谷の奥より出まじバおくいぼなりといへまどかゝる言ハ歌よむ人の雅趣よりぬと思ひよれるなれど徴文には取がたかれべし實には山よりも野よりも出べし凡そ鳥類數千百種有べけれどかれ意より名におくなありやすらじや生類に名ばくるなるハ真淵が説しかおべきなり

續萬葉論巻一曰揔じて鳥などの名は聲によるも亦は食物によるもて名れ又其羽色により形ちによれも有ありほとゝぎすは はさなく聲の聞ゆるなりの名なるを西國にては郭公は大虫喰

といふたゞもはるかなるされバ宇ゞ多ひもは殺せざうしくひといぬ うしは虫の揔名なるまば虫喰鳥といふことなるまとハ巣に生ず ふものなれバいふ一説にうはくしく巣はくふよるといへど うすくひともあるはざさもいふべしタひといひて次にすといへバ さハ聞えびもといふはかゝひとぞきぶひなどその類多巣に 生れ故もといふは大の類は鳥は揔稱ともれなるも其故其 好む物はあぎて名附せる類雁に和しくひ行り菱といふ水艸 を好ミ木にはるだみといふ有も鶴その實を好む故とりや○

鹽尻巻十七曰鶯は愛作巣（ウクヒス ウツクシク スヲナス）也

直胤按ずるふうダひもは殺せざうしくひといふ大は言 聞えがたしとし誤脫あれなや一本の外いまだ見されど

校訂するふよしあり巣に生れゆゑスといふとゆへるを以て
ゆゑんカラス モズ キヾスなどを巣によれるゆゑやそハ志ら称
どもあべての鳥の巣に生ぜぬ事をゆゑ他の又文字はあ
をバ何とかいはんぬるくをカラスをクロシなりといへりさしバ
巣によれる名にハゆゑ性じ真淵が説おぼつかなく信景の説
もうけがたし愛ハうはくしをよむ字なるをはゞウとのこ
いひて末をはぶかんをといこゞ例あるもや
東雅巻十七曰春鳥ウグヒス萬葉集に春鳥讀てウグ
ヒスといふしも楊氏の説によれるあるべしウグヒスといふ義
も不詳鶯といふ物ハ即今海舶に載来まれ黄鳥といふもの
なるにウグヒスをゆふものにあらず鶯の字讀てウグヒスを

あるといまだ其所出をしらず万葉集の中にも鶯讀て
ウグヒスといふし見えそれぞ因来れ所既に久しきこと見
えたるを楊氏春鳥の説のごときもその據をしらず鶯讀てウグ
ヒスとなるを支をとてに此國の方言其如くなりしかも春鳥の字
を亦萬葉集のごとくにも取用ひしこれ誤ふべく是彼よりもま
さるし字にも見れまでバ今ならふを其字を用ひしなるをウグヒス
といふ義の如きも舊く釋せし支も見えずされど梅がえにをも
ウグヒスを巣をなくといひし如きをウグヒスといふ名其義疏の
ごとくにを見えぬなるを舊説にも源氏物語に鶯の巣をもし
松といふ事を鶯を松にもをくふといへるをなべてハ梅竹に巣
をなぬなりともいふ事ウグヒスとて木にもあまた竹にもあれ

そのむらがりて生ふれ所に巣をくひぬるものなるを我はれし
なるべし古語に草木の類叢つて生ぬ類をつぎ以ひ轉してハ
ウといひけり日本紀に竹林讀てタケフといひ又万葉集抄に
麻の生ぬれ所をもウといふ也なれど見えし此なり万葉集
の歌に柳のウレに鶯鳴けなど讀しウといひしに上に見えし
義ふしそレとハ詞助なるなり或人揚氏春鳥の事によりてその
春鳥といひし惜春鳥報春鳥なれどいひしものゝ類とやいひ
ぬらん今試に漢音を操つてくウグヒスの語を學ぶ如きなれ
惜春鳥の莫摘花巣と啼がごとく又報春鳥の春起春太と
啼が如し護花鳥の無偷花巣と啼がごとくにもあれなりせ
いふなるべきされば惜春鳥は其類不踰燕と見え報春鳥は

如鴝鵒色蒼と見え護花鳥は似燕而小と見えたるその形状
の詳なることも見えば舜水朱氏はウグヒスは黄頭鳥に似たる也
といれしせいふなるに黄頭は鳥の鷙なるものの麻雀に似て羽色
更黄潤觜小而尖利爪剛而力強なれど見えたりなれば
もしにもこの鳥の名漢ふしてよぶことなれの如きは古よりはまびらる
なるぬことゝ見えたり

直胤按ずるに白石翁或人の説とて惜春鳥報春鳥護
花鳥の類をいへるに朱舜水は黄頭鳥に似たりといひ
しはとるにその解いまだはくさばそもく惜春鳥ハ潛確
類書巻百五に海録碎事を引て惜春鳥大不踰
燕其聲曰莫摘花果人謂之護山雞と見え報春鳥ハ

百舌のごとく前にあぐるが如く護花鳥は秘傳花鏡巻六に護花鳥出二太華山中一毎レ遇二奇花發一人若攀折則此鳥飛来盤二旋其上一哀鳴曰莫レ損レ花莫レ損レ花亦花之知已也特附二記之於末一以見二花鳥之靈一其形似レ燕而小なりと見えたりされどうぐひすとなせる説なし黄頭鳥は末に引たれどなほ出さず是等をひとつにあつめよりて鶯なそおもんを補されつるとやいはむ

故友人正方が説には生をフといふはもと草木の生れこるがことに付ていへるにて叢れ意はなし轉じてはフのごとくウといふもまたいへるなれど末に付詞にハフ〳〵ウのごとくいはぬも音便なくや後世の書などなりてハ出ずる言なり通ぬ例いかにや

おもひかけずとは萬葉乃柳のうまてに云てと有を引て云ウレとは詞助なりといへるも甚ひがごとなりうまとは末なり多くいはれたる詞なれバ本書に付て見るべし藤乃うれなどもウレハなほその末といふうまをいふるもあるべし

○喚子鳥をうぐひすなりといへる説

古今和歌灌頂部曰よぶこ鳥は説おほしといへどもむかしのよぶこ鳥は太國に女の野に出けるをびたれは子を鷲鳥にとられ侘うまよりつまなく程にまどひて死□其女身より小鳥おほく出きたるが子をよびけれやうになくあかぬしにとの聲にそそがまし是今のうぐひすのよぶこ鳥そうぐひすとなりて秘事なり○徒然草鉄槌巻五曰貞徳抄云櫻井基佐心

敬法印にあひて大原に行て夜話の雙紙一帖あるをその
中に中略宮内卿いはやうまくちりめる花乃かぎに来てそれ
よぬこ鳥にさゝめくなくこれやうく久日すなるを
直胤按ずるに二書ともに呼子鳥をうぐひすと共異名と
せしハ悞ならんれ乃ま喚子鳥考ならんとおもへど
詳なる事ハ其書に譲ゆるくしにて此支乃こをなげぬ
○倉庚をむぐりと訓るを訛まりといふ考
萬葉集代匠記巻廿九曰和名鈔云鶬鶊和名比波
里月令仲春倉庚鳴といふによれバ毛詩も同じくひぐ
ゆると可讀やうぐひすと云を誤ゆるなるを○庖厨和名本草
巻十曰元升云本草註ニ倉庚ヲウグヒスノ一名トス按

和名鈔倉庚ノ和名ヒバリ月令云仲春倉庚鳴今コ
レヲ詳ニスルニ鸎ハ立春ニシテ鳴ク是ウグヒス也仲春ヨリ
早キコト三十日倉庚ノ鳴ハ三十日オクレタリ依之イヘバ
倉庚ハウグヒスニ非ズヒバリナルコト分明也月令説正シカ
ルベシ和名鈔誤リナシ
直胤按ずるに鶬鶊を鶯の名とせしを爾雅字始免諸書
に出ずること前に載せるが如しひぐりといへるを和名鈔
巻十八に崔禹錫食經云雲雀似雀而大和名比波
里楊氏漢語抄云鶬鶊と見え大和本草巻十五に
三才圖會を引て告天子をむぐりとし倉庚蒿雀を
むぐりと訓ずるハ誤ゆるなりといへるを此説考へ得たりや

いふ事し朱氏談綺巻下に雲雀日本ノヒバリニ能似
タリ其見えたりされバ雲雀に近ぐりなれど倉庚なり
といへる楊氏が説を用ひしに和名鈔乃誤つる事案山堂肆
考羽集巻廿に格物總論を引て鶯三四月鳴聲音
圓滑とあまたバ仲春の時をもてあぞ法ろふべくもあらぬさる
故あれがちに雲雀とするにたがへつる新撰字鏡巻下に
鴰と鶻を比波利とよめせられど倉庚の名に見えぬさされ
同名異物おほうる古今注巻中に鵲一名神女と見え
中華古今注巻下に鷰一名神女といへれさぐひこの
ぞふかはいとまあらぬされど鶬鶊の名も鶯乃こふあらぬ
雲雀をも呼べかなかそはいまだしらざれども月令に仲春

倉庚鳴といへるを引て鶯乃支なしずといへるに謬つる事案
惺窩もゆゑの注にまうをくうぐひすとよむべしといひける
とぞ鶯の一名を倉庚といふことに諸書に明證あれものを故
しひて近ぐるまでいへるハ穿鑿うしたが如くかしくなれ
説にやあらん月令乃倉庚故にやうぐひすと訓るを
契沖其余乃説もこれ非なるに

○うぐひすを婆餅焦なりといふ説附百舌をもとに
充れに誤まるといふ考

羅山文集巻七十四曰俗稱日本所謂鶯蓋婆餅焦
乎抑亦顧渚山中報春鳥之類乎朝鮮黄鶯大於朝
鶯而其色不異慵齋叢話云黄鳥到秋變為鶯是異

說也而有所見云焉我朝先儒訓黃鳥(ウクヒス)倉庚(ヒバリ)○日本歲時記卷二曰立春乃時よりて婆餅焦(ヒバリ)なくしなくしの乃鳥ハ[illegible]の黃鳥にもその音なれば[illegible]さりて[illegible]とあり黃鳥の聲きける人をいへる田舍にて山中なりしでは[illegible]ハ来ならば都にはうぐひすと多くして園有やぶ林ちかに所は家にかハざれども其聲賞すべし秋に至れまで鳴[illegible]やまず是地氣[illegible]故なるべし

直胤按ずるに事物紀原卷十に昔人有遠戍其婦山頭望之化為石其婆為餅將以為餉使其子偵之恐其焦不可食也往已無及矣因化此物但呼婆餅焦也今江淮所在有之と見えたれば婆餅焦[illegible]

せんとしのぐ[illegible]考ぬべし報春鳥は反舌ふく百舌なれ陳藏器が今の鶯なりといへるは黃鳥乃支なれば[illegible]状ち鴝鵒乃如しと[illegible]別[illegible]鳥[illegible]

因に[illegible]百舌をモズとよめる[illegible]和名鈔卷十八に兼名苑云鵙一名鷭伯勞也楊氏漢語抄云伯勞毛受一云鵙日本紀私記云百舌鳥と見えたれば百舌は鵙に[illegible]モズと訓[illegible]誤[illegible]和名鈔に[illegible]日本紀私記乃百舌は書紀卷十一曰仁德天皇六十七年十月丁酉始築陵是日有鹿忽起野中走之入役民之中而仆死時異其忽死

以探其痍即百舌鳥自耳出之飛去因視耳中悉
咋割剥故號其處曰百舌鳥耳原者其是之縁也
と見えたりしかはいまだ新撰字鏡巻下に鷓伯勞とも
に毛受と訓て百舌乃名を見えば爾雅注疏巻十に鵙
伯勞也郭注似鶷鸛而大と見え春秋左氏傳巻廿
三に伯趙氏司至者也注伯趙伯勞也以夏至鳴
冬至止と見えたり本草綱目巻四十九に伯勞伯鷯
博労伯趙鵙鴂時珍曰案曹植惡鳥論云鵙聲嗅
故以名之感陰氣而動殘害之鳥也伯勞即鶪也
夏鳴冬止といふも乃是なるを百舌鵙なるぬしを同書
集解乃論詳なるまでくだくしられば乃せどかの書り

はなく見ればしきどのくさきことばのたやはへなれば
歌にもよくこそ春より夏のきそくなりぬと秋に至つらくさう
るに鳴ぬり秋をむしきとはさる鳥なれば秋乃動物也
百舌を春秋ともに鳴よしなれば百舌とことばとを異とるを
なれことはあらしきしされば百舌をあるにあふとも定めがた
れ鳥なるは寺島良安を黒鶇とし向井元升を鵯とする
是等詳に百千鳥考のくだりにいふべし

○ウグヒスに剖葦黄頭鳥報春鳥喚起鳥巧
婦鳥等はあてしを悉く非なりといふ考

覆醬集巻一曰嘲吾邦黄鶯非真黄鶯　春上竹梢
雖秦鳴形聲毛羽異倉庚見來爾是鷦鷯類幸被人

呼黄鳥名○同續集卷二曰臨園（日本無黄鳥誤以剖葦為鸎見本草）
庭園無數櫻花使晩梅為兄翠雀掠水落魚剖葦啼
竹學鶯
直胤按ずるふやうぐひすとは鷦鷯の類といへるを秘藏抄
の赤人が歌によるとしるべし剖葦ハ爾雅注疏卷十
ふ鴟鶬剖葦郭璞註好葦皮食其中蟲因名云江
東呼蘆虎似雀而青斑長尾といへるものなく和名鈔
また兼名苑を引て巧婦は蘆虎と名ばなるよしいへるまで
本草綱目また巧婦鳥ハ鷦鷯の一名とし剖葦を鷦鷯の
一種とせるを和漢三才圖會ゆゑ本草和名鈔ともふ鷦鷯
一種とあらるを非なるといへるを尾長しやいれ好て葦の

皮を剖といへるをうぐひすとは徴なり大和本草卷
十五にヲゲラ腹白ク尾長シ背ノ毛色ウグヒスニ似タリヨシ
鳥トモ云又ヨシハラ雀ト云筑紫ノ方言ニハギヨ〳〵シト云其
ナク聲ギヨ〳〵シト云ニ似タリ麥熟スル時鳴其聲晝夜
不止甚シゲクカマビスシ漢名シラズと見え物類稱呼
卷二ニ剖葦鳥畿内及勢州邊くしくら雀と云出雲
及西國四國ふくぎようくしや呼土佐國にてハむだ
ぬしまたとげらたどくもよぬなり東國にてよしまつさと
いふや見えたるとぬまだうぐひすとはならじ篤信がその聲
晝夜止ずとぬをれまてもおもふぬしやうえしまたは夜
鳴鳥にあらじたのよしきりといふハ人家近きとたゞまた

来らざと小篠原にしたらなどままく見れ鳥なるもおのまた
なまハふのぞりし折ゐを淀川の堤にてしたしを見そう
きさまざと丈山の考へも是なりとハいひがたし
朱氏談綺巻下曰黄鶯日本ニナシ日本ノウグヒスハ唐山
ノ黄頭鳥ニヨク似タリ唐山ノ黄鳥ハ大サ日本ノヒエドリ
ホドアリ嘴ト足ハ朱色身ハ黄ニシテ羽サキ黒ク其聲甚
長シテウルハシ
直胤按ずるに黄頭鳥を秘傳花鏡巻六に黄頭小
鳥之鷙者似麻雀而羽色更黄潤嘴小而尖利爪
剛而力強人多以籠畜之大槩取毛緊眼突者為
良鬪則兩翼相搧嘴啄脚扯自有許多相角之態

頗足動人賞鑒但此鳥較之畫眉雖易得而難養
片時失與飲食即便餓死と見え事林廣記巻八に
黄頭病方黄頭鬪罷身痛宜取尿珊畔紬砂飼之
則愈とのせたれど雞のごとくよくそこうふものなれ
べしまた留青新集巻三十に黄頭鳥無別名とあれ
ど事物異名録巻三十六に韻府春黍即黄頭鳥
とのをそらに尺素往來に鶯鴨のとり合といふことにある
をおもへバげまを是かれうぐひもを似たるべしされど
黄頭の名によるにいたぐれ黄ばる所にあるあやまりへぐ
白頭翁も頂白く猫頭鳥をいたぐき猫に云ましけれバ
ありうぐひもの如くなるにハ黄頭の名を似げれ如れ

べしおそらくハ蓋ちの鳥なるべし

大和本草卷十五曰ウグヒス或曰婆餅焦也今按婆餅焦於中華書往往見之石川丈山ハ剖葦ヲウグヒストス或曰ウグヒスハ月令廣義所謂報春鳥也未知何是

直胤按ずるに篤信も考へ得ざりしもやたしかふそれとさぐくちをしたうれども日本釋名に報春鳥をうぐひすとか那をつけしかく同時にものせしぬこに二法の鳥共名をおそせ問るハいかにぞや報春とも婆餅とも思ひわながらんにてしひてかゝ名をつけてどとも

うぐひすゐてことかゝぬぢきことなるなおほくこハ右の二名のうちやうおもへだなるべしさしバ亦云ゞことあり述異記卷上に顧渚山有報春鳥春至即鳴秋分亦鳴似鶗鴂之類也と見ゆうぐひすハ秋鳴とれし是らの説思ふべし

廣大和本草卷九曰異禽考及天台異産考云喚起鳥似鷦鷯稍大胸下柳黄色春初發聲音圓艶可愛其鳴聲曰吉弔故名曰秦吉弔是日本ノウグヒスト稱スルモノナリ先輩ウグヒスヲ以テ鶯鳥ニアツルハ非ナリ

直胤按ずるに山堂肆考羽集卷廿一に百舌一名喚起と見え桂海虞衡志に秦吉了如鸚鵡紺黒色丹味黄距目下連頂有深黄文頂毛有縫如人分髪能人言中畧出邕州溪洞中唐書林邑出結遼鳥中畧即

吉了也と見ゆまた本草綱目卷四十九鸚鵡附録
に時珍曰秦吉了大如鸜鵒紺黒色夾脳有黄文
頂尾有分縫能效人言音頗雄重とあるは白氏長慶
集卷四了秦吉了出南中彩毛青黒花頸紅耳聰
心慧舌端巧鳥語人言無不通といひ瑯邪代醉編
卷三十八に萬花谷を引て瀘南有畜秦吉了者亦
能人言有夷首欲以錢五十萬買之其人告以貧
将賣爾秦吉了曰我漢禽不願入夷中遂不食而
死といへり大和本草にはたまとサルカと訓ぜれ廣大
和本草に非なれよしいひてくうぐひもなりとしれし
それど此説誤つるなるはうぐひ多人語せざるなにくあるを

らるなりさはいへ同名異物まであれば喚起吉了ともに二種
あれど山堂肆考補遺卷四十五に喚起鳥名蓋晨
鳴之鳥也唐詩喚起搔頭急と見えて百舌ともおもて
れどなほ勘ぬべし百舌とは前に委しく出せばあるにはは
要をはこゝにしるせ程

本草正偽卷十一曰愚案ズルニ巧婦鳥ハウグヒス是ナリ
古來鶯ヲウグヒスト訓セシヨリ諸説紛紛タリ巧婦鳥ハ為窠
ノ巧ナルヲ以テ名ヅク時珍曰状似黄雀而小灰色有斑
ト云ハ鷦鷯ミソサヾイナリ聲如吹嘘喙如利錐取茅葦
毛毳為窠大如雞卵而繫之以麻髪至為精密懸於
樹上或一房或二房是全クウグヒスノ巣ナリ鷦鷯ノ巣ハ

木曽山中ニ甚多シ岩窟土穴ノ中ニアツテ子ヲ生ズ予先年木曽山中ヲ巡行シテ親シク見ル所ナリ詩經名物解ミソサヾイ巣ヲ巧ニスルト云臆説ナリ綱目又一種爾雅謂之剖葦似雀而青灰斑色ト云是ウグヒスナルベシ巧婦鳥ノ聲如吹嘘モ亦ウグヒスノ囀ナリ鷦鷯ノ囀ト異ナリ是實ニ千古ノ惑ヲ解ベシ

直胤按ずるに此説いみじまことにかゝる巧婦は鷦鷯にてさゝきにうたがひ何なべからぬ聲如吹嘘とあれがさゝきに異なるといへれど時珍ハ灰色有斑といひ爾雅に桃蟲鷦なりとあれば桃の梢をほりもとれるものなれべしされば一名桃雀とも呼ならばやまへにもいへる如くうぐひすと折にて桃櫻などにも通ふべけれど常に梅竹にやどるものなり亦爾雅注疏に陸機が詩疏を引く其雛化而為鵰故俗語鷦鷯生鵰とあるにかれうぐひすにあらざるなと明らかなりかくてもうぐひすに似たりといふべきなれどこの外鷦のうぐひすにあらざる徴はおのもいはずも人知ぬし誰うたがひ字解にいたらんにはしひて巧婦なりうぐひすとにあらんとしくいさゝか似たるをとるとてはほく異なれどバ載ざるなりゆゑかくれ説にあまぐひそ

○宇久比須ハ柴鶺鴒なりとかふ説

本草啓蒙巻四十五曰ウグヒスハ漢名柴鶺鴒清俗

直胤按ずるに柴鶺鴒とハ清人の方言にもせよ朱舜水

ハそのさしたるし當まりや否やをしらべ

○うぐひは餌かひ乃説

喚子鳥巻上曰鶯餌飼（生瓦七分青ミ入粉一文目）大きさ雀に似て毛色くすあをくこれいなる鳥なりすこし鳥をやぬとりといふ秋の末よりて春のはじめまで出る巣子は夏乃初めに出る囀ゑ大きに善惡あるを上品は三光引鳥といひ中品は三光つぶまたはむじなり下品は屋ぬとりて野ぬなり又付ケ子をいふ事すれ巣子を取られ三光引鳥をきうをきられをいふなり聚聞なしひて三光をぬけれそのなり三光善惡をなぐあれなりて又入ほしなしぬけおうなどてくせも有

直胤いへらく俗書なほど百千鳥と名づけしる寛政

十一年乃板本すれは大うたは呼子鳥に同じけれども少しく異同も見ゆそがなりにうぐひは巣立して親鳥にはなれてすれ字飛子と呼子飼のうちにあるへ子と云すれてよく人にはじむ又ムシ引鳥三光コケ藤などいふがあれどしたるをうぐひは我かくんとおもひ此呼子鳥とかの百千鳥の二書にはなれて見れ爲し

○うぐひは笛若説

永久四年百首曰笛俊頼朝臣青竹を雲乃上人ぬきそそ春乃うぐひはさへぞすなる○江戸塵拾巻五曰東叡山の麓根岸の里に松川伊助と云者あり聚當所若うぐひは音を聞て初て鶯笛は作る子飼の鶯の付聲

とまるに至てよ詠し是より嬰兒れをてけそびとなまるを
直胤按ずるにうぐひすと笛ハ塵拾て松川伊助造るをそれし也
しるせれどもやう永久のあらはりけるしをしるべし

○宇久比須乃古事

扶桑畧記卷廿四曰延長八年六月十四日丙午藏
人頭有相朝臣仰外記云去九日大極殿内梁上鷺
居寮占云子午辰戌年公卿可有病者此由令告之
○拾遺集卷九曰内よりて人の家に侍けれ紅梅をほら
せのひ多なるにうぐひすの巣くひてとべりけまバ家のあるな
じの女まれかくおこうを侍ける勅なまバいともかしこし
うぐれすの宿をとゝさべ此がたゝへんかくそうせさを

けまバなるべきなりにきる○大鏡卷八曰天暦乃御時
に清涼殿其御前れ梅の木其枯そりしかぞをとゑさせ
給ひしにあるにがしのぬし其くらひ也にふくいまをうるしと
おうけのたりてつかなきのごもハえ見たるじきん地もとめ
よとのたまひしかバ御堂京にあるあるさしかども侍らざる
しに西の京をおくなれ家に色たくされをる木其いよ
うたんうはくしたが侍るしをほりとるしかバ此へ御かじ
の木にたまゆひつを候てまゐまといたをたうびし
かバ御れやうたをたとくまゐりて候しなんぞとそ
御らんじけまバ女の手にくかれて侍るれ勅なれバ此也
もかしこしうぐひすの乃やどとせいかじたるへんとおるを

けるまにいやしくおぼしをされてなまふものゝ家どもそでさ
さまの給ひをまぐ法をゆるのぬしのこむもとめおもむ所
なりけるを遺恨のまぐさをもたるりくるこれとてあまへれて
しぬしをれ○下學集巻下三曰本朝後鳥羽院之
時京洛有寡婦園植一株之梅紅白相交其花尤異
毎春有鶯來宿可謂鶯花相得矣院聞之欲移内園
婦作倭歌云勅最賢云云院感而不移也盖因婦歌
名曰鶯宿梅古老曰婦家舊園京洛二條林光院是
也

直胤以是く大鏡を拾遺集と同じまだらにて重復
なまどくくしけまぐのせぬ下學集ハ異文あるべきなく

いぎ門按ぎれに下學集ま
後鳥羽院の御時とかけるを誤まり大鏡に天暦の御時
とあれ字用ふべし
後鳥羽院を壽永三年位にはなるひて元暦と改元
あるされぐ
村上天皇の天暦とを凡二百四十余年のちぬそがひ
いつを下學集の作者天を元におもひたがへしなるべし
吾妻鏡巻十九曰承元五年閏正月九日壬戌自永
福寺邊被移殖梅樹一本於御所北面是北野廟庭
種也匪濃香之絶妙南枝有鶯栖依之被賞翫之○
東齋隨筆曰六條の南室町の東一町を祭主三位輔

国立国会図書館　タイトル『宇久比須考 2巻』 請求記号 特1-913
ガラス使用

親が家なりけるを丹後若天橋立をまゐらせて池の中島を
たるかはさし出て小松ありがくうゑなどしまりけるを春の
初に軒ちかに梅の枝にうぐひ須の止つまで已の時ばかりに
来て鳴けれをいつもがくて思てあれを愛するよりはか
の事なりけるを今案時の歌よみどもにかゝる支こそ侍れと
つぎゑんぐらして明日此辰の時ふやうりてきうをゐへとぬき
まさして伊勢武者のものゐもるがいつもけるふかゝること有ぞ
人々やうりてさうんずるふかゝしこ鶯ちちなくしてやる
なとかひけれぞ此の男なじかハはかくし候くんと云輔親
とく夜の明よかしと待明していつしこのとくおほてく寝殿の南
面とりしつ居ひていまゝなみ居まり辰の終ぐりけるを時の歌

よみともあはまりきたりていまや鶯なくしこうゑんをあひを
おふさゐぐしを已の時ばかりにふ必きなくが午の時さがりまで
見えねばいかなるんと思て此男ばよびくかのふ鶯のいまだ見
えぬを今朝をおざりけるかとこへバ鶯のやつをさなぐしよりも
とく參て侍つるがかへりげを候つるかひじ召とゞゑて候といふ召
とゞむとハいかふとこへぐ取て參らんとて立ぬ心得ぬことこの如と
おもふほどり木の枝に鶯を結付て持来れつを大方ゐさはし
ともいふぞかうまゐしおハかふかくハしはるぞとこへぐきのふ
仰ふ鶯やるぬと候しかバいふがひなくにがし候なしハ弓矢とな身
にたるうくおぼえ候てぞしどうをさげて射おとしこゑ
侍つると申きれバ輔親も内ゐつるまゐる人も淺猿と思て此男

が良を見まぐまさをかひとりていなまくまぐまぐまぐまぐ
祭主とくそちらとといひ名を人々をかしさいふぐらるをなれ
ども男の氣色はおそれてこえわらはぬとりそちぬとり
たちしてこゝかへるにかゝる興さむるんどハ事もおろかなる
直胤云なのぬること榻鳴
曉筆卷十八にも見えたり
○太平記卷廿一曰暦應元年四月
廿五日佐々木佐渡判官入道道譽秀綱が配所ノ支
定テ上總國山邊郡ヘ流サル道譽近江ノ國分寺迄若
黨三百餘騎打送ノ為ニトテ前後ニ相順フ其輩悉猿
皮ヲウツボニカケ猿皮ノ腰當ヲシテ手毎ニ鶯籠ヲ持セ道
道ニ酒肴ヲ設テ宿宿ニ傾城ヲ弄ブ支ノ體尋常ノ流
人ニハ替リ美美敷ゾ見エタリケル○臥雲日件録卷二

曰文安四年丁卯二月廿日迎普門寺勝剛對談數
刻中畧城呂頗能和歌問之歌人例有冨士之烟之語
來由如何呂云昔天智天皇代冨士山下市常有老
人來賣竹人怪之一日行尋其皈處冨士山中一村
翁家有處女太艶美翁曰女初於鶯巣中得一小卵
卵化為此女抚艱日久我毎毎賣竹以為家資故世
名我為竹採翁云云此事聞于朝廷勅求此女遂納
為帝妃名曰加久耶妃妃一日白帝曰妾以有夙縁
来侍左右今當皈天上因出不死藥天葉衣及粧鏡
奉之曰若見思妾則可見此鏡鏡中必有妾容言畢不
見後帝被天葉衣飛去到冨士山頂於此燒不死藥

與鏡其烟徹天凡歌人所因本於此也○長明海道記巻下曰むかし採竹翁と云ものあるを女を赫奕姫といふおきなが家の竹林に鶯の卵子の形にかへりて巣の中にあるを翁養て子とせりしかるにかゝるをかゝよりしをとなぐひかし光あり
そかしこなるをてらしに嬋娟なる兩鬢ハ秋の蟬のたゝ孫婉轉なる雙娥は遠山のいふ一しぐひ咲てぐらしれたびなり見こさく人こゝかなるこゝ我多門此姫は先生に人として翁にやしなはれなりけるが天上ふうまれてのちハ宿世の恩を報ぜんとてしばらくたのおこされが竹に化生をるゆゑにあはれむべし父子のちぎりの他生にも変ぜざるなとゝ我たれよりして青竹の世の中に黄金出來て貧翁をもちまちに富人となりに

けるを其間榮花の家好色のこゝち月卿にかゝるをあらそひ雲客色を重じて艶言をはくし懇懐を抽て常にかくや姫が室屋に来會して絃をしらべ歌を詠じてあそびそりけれ
されども翁姫難詞をむすびてうちとくゝ爲たゝ語もなし時の帝たのくしはきたし召てゆくしけれども參らざりけれバ帝御狩にそびのよしにて鶯姫が竹亭に御幸しなひてをし
のちぎりをむすび松のよはひをしなべしおきなのあるにたゝ語あるて後日をちぎるを申けれど帝むなしく歸るをひぬかしへ
の天是を知て玉のまくらに金の釵をまれいまゞ手なれざる
さはふ飛車くぐりて天にのぼるもぬ
直胤按ずるに古支記巻中にり娶大筒木垂根王之

女迦具夜比賣命といふことあるも此外の書にもかくや姫
の名のミハ粗見ゆれど竹とりの翁のことハのせざされバ附會
の説をいとうけられぬことなりてまたく万葉集にをさぞ
なて竹取物語とはくりまうけ竹取物語によりて海道
記日件録などにしるかきれあるべしうぐひすのよひて
の中よりうまれしといふと萬葉集にも竹取物語にも
載ぜ萬葉集巻十六より昔有老翁號曰竹取翁也
此翁季春之月登丘遠望忽値煮羹之九箇女子
也百嬌無儔花容無止于時娘子等呼老翁嗤曰
叔父來乎吹此燭火也於是翁曰唯々漸趍徐行
著接座上良久娘子等皆共含咲相推讓之曰阿

誰呼此翁哉爾乃竹取翁謝之曰非慮之外偶逢
神仙迷惑之心無敢所禁近狎之罪希贖以謌也
ゆるを

攝陽群談巻九曰鶯塚攝津國西成郡南長柄村ニアリ
所傳云往昔此郷ニ於テ家冨名榮テ近里ニ知ル者アリ
一人ノ子ヲ持リ寵愛甚深シ常ニ鶯ヲ愛春ヲ持テ夏ノ
至ヲ悲ム歡樂ノ極テ其子幾程ナクテ死ス鶯モ亦餌ヲ喰ズ
シテ終ニ落ヌ父母イタク歎テ其鳥ト氏ニ田圃ノ側ニ埋テ塚
ト成ス因テ以テ時人鶯塚ト号テ世ニ傳之一説孝德天皇
長柄豊碕ニ宮造シ給フ皇后ノ遺骸ヲ納タル塚トモ云リ
其證不詳毎歳元朝此塚ノ邊ニ來テ聞者鶯ノ初音アリ

ト云傳り○新著聞集巻五曰下京にくあれ人の庭木
に鶯巣をはなる子をやしなひ多るに蛇来り木にのぼり子
をとらんとは親うぐひすはけしかるは啼ぬ一羽のおやとりハ
そのまゝ飛さりしが頓て歸つるそのうち蛇さらり巣
の口にはらはさしよりそれぞ親鳥何事なんロまくなへあ
巣のくちに出ませぬ其のまゝ蛇逃退くなとたびくり及
ぶしを見し人のまゝに憎きことにおもひ蛇を殺せしに鶯巣
よる物をおとせしぬるまを見ませぬ蚰蜒なり延寶元年
の事ふく侍しまことに蛇の蚰蜒といぬせがれなとゆう
にしてかしるそりきんいせぬしぎのなとふくなん
ゆるし

○宇ぐひ寸歌をよみし說

曾我物語巻五曰花まなく鶯水にもむかはづさへうたを
よむものなといひ多おもふんとう八ぶんのみどかうけん
てんやうの御時やまとの國かはらの山のぬをせかうけん
寺といふとは僧あるけるがまたもなきでしをさは
そてぬかくなげきのうつぶのとしの春寺のきだ
のなどゑになくうぐひ須のこゑなきけば初陽毎朝
来不相還本栖となまゆ来をじにうはせばうたなりはは
春のゆしぬぶとふはこさられどもゆはぞぞかへるをせのとこ
ゑとうぐひまさしくよこそるふ歌ぞかし○本朝一
人一首巻九曰鸎詩林子曰倭歌家者流傳稱曰孝

謙天皇馭寓大和國高間寺僧有侍兒甚愛之一旦
侍兒暴死僧悲歎殊甚既而歳月隔哀情薄而忘之
時有鸎啼庭梅僧怪聞之則如唱初陽毎朝来不遭
還本棲僧以倭字寫之曰波津波留乃阿志太古登
爾波幾太禮土毛阿波天曽加恵留毛土能須美加
爾云云僧悲慕乃悟彼兒化為鸎而哀痛不已今按
来讀為鼇與支韻通支韻與齊韻相通則来棲叶音
無妨故載于此以傚中華禽語之例其事怪誕姑舍
是

直胤いへらく和州寺社記巻上に高天寺ハ金剛山ノ
麓ニテ草庵五六坊有古ヘハ七堂伽藍所ナルヨシイツ

ノ頃ヨリカ零落シテワヅカ三四屋ニテ三間四面ノ本堂
十一面観音并釋尊ノ霊像ヲ安置ス其側ニ遍昭院
ト云草庵ノ庭前ニ古ヘ孝謙天皇ノ御宇ニ鶯トマリ
居テ和歌ヲ詠ジタル梅ノ木今ニアリと見えたり此外
榻鴫曉筆巻十和漢三才圖會巻七十三日本輿
地通志巻十二和州舊跡幽考巻一雜和集巻上
謡曲白樂天などにも乃ぬれことを乃せやれど同じもぢらな
きぐ漏し川是等其書なのぐ高間寺は高天寺
ふ作れる
按ぢれに些支ふれくいひけるへしを思へぐ其のうみ
うぐひすと歌やよみ久ぬ事にしたるれども曽我物語に

古今集の文を引て花になく宇久比須のうたをよむ
ものなといひけるハとかなりぐしきたがへて顯昭が古今
集序注に教長卿注云花ニナク鶯等者聞鶯蛙等
聲之人何人不讀歌哉ト云也今按此義不然不相
叶此序之前後歟上見物ニツケテ云出ト書タルコソ
見花聞鳥テ詠歌ヲスル心ニテハアレイキトシイケルモ
ノトハ物トシテ有情者皆可詠歌ト云也即鶯囀蛙鳴
ヲウタト云ルナルベシタトヘバ鶯ヒトクく郭公クツテタ
ハラン蟬ウツクシ蛬ツヾリサセ此唱等自然相准心動
言形之義歟餘禽獸之聲モ同支歟如彼義者ハナ
ニナクウグヒス水ニスムカハヅノコヱヲキヽテタレカ歌ヲ

ヨマザラントゾカクベキといひ親房卿古今集註ニ古
今の本注にきうぐひすれ聲をさく蛙のこゑを聞人
何人か歌なよめざりけれと釋せり此釋誤なりと云ゑし
花になく鶯水にすむ蛙のおのまとまぐけるもこれなの
が心をのべく歌なよむに似たるといふといへる中略真
名序と假名序とハ全くその心不相違也故に花になく
うぐ花寸水にすむ蛙の聲を人の歌をよむに比量する
こと顯然なるを古語あれをものをかなくぞ音なるを古ゑ
有ものを必ずがむる詞にて案此我歌といふべしと見え
たるをとにて古今餘材抄巻一に是ハなれ初の古語
をこゑろ見てそぐ人のこゑ限らず禽獸に至るまで聲

これらのハ各それらが歌なりといふ事なるまでもなく
心得てうぐひす蛙のよめれ歌なぞいふことハ用ふべ
からずと見え榻鴨曉筆巻一歌起条に春の霞ゝ
ぶく山秋の時雨の降タれ野邊梢の蝉水鳥の聲
花の色紅葉のうぎを朝ぎ嵐夕の雲ゝ歌なりと云ハ
両儀忽まつれ天なる地さぶまるそ一二を生ぜし上
の事なるを古今の序に花に鳴うぐひす水にすむ蛙の
聲をきけばれのぞのあらうに我よまざりけるなら
ことあや侍りんと見えそるを宣長が古今集遠鏡巻一
にも序文を注して花ノ枝ヘキテ鳴ク鶯ヤ水ニスンデ
アル蛙ヤナドノ聲ヲキケバソレ〳〵ニ面白イトコロハミナ

歌ヂヤとかけるさるを我古今集ゝ序文ハうぐひすとうた
とよこしといへれなれ思へ曾我物語の作者が
誤るなり高間寺のうぐひすなるを後〳〵のぬるゝ
のせく古くいひ傳へしなるをもバまさしく歌とよこ
しあらんそれとまれかく御れ古今集の叙を是等
の説のごと心得べきなり案

○うぐひすの考

直胤按ずるに此ハ須に御はべき文字いまだ後
なしの書どもに見及ばしかれ此ハなれ鳥成べし
おなじ漢名をしかなしぬとうとおもふと目馴たる
とうふてこそ四十カラ五十カラ小ガラ ヒタキ ノジコ

コマドリ　ヱナガ　ムクドリ　カヤクグリ　ルリ　キクイタヾキ
ヒハ　カシドリ　ヌカ　ケラ　チドリ　此等の類ひ多く
おほかるが中にも又此等の類ひなるもまじりて聲
めづらしき鳥なるをばやがて鶯ともいへる事後人
非なりとおもはれなるべしかくいへばしもこれらや
まれのくにのものなる蛇ニ足を副たるなり禽経ニ羽蟲
三百六十といひ酉陽雑俎巻十六ニ鳥有四千五百
種といへり拾芥抄巻六ニハ羽蟲三百三十と見えたり
其の異同はあれどもあまたあるものなれど名はなほ
鳥もさはあるべしよくそのたぐひを其國ニ有ごとくも
あるを亦さるまじくひめやはあらんとおもふされいさゝか

似たるにまでつけたるにしかるを是ぞかしもそれとかうがへ
のべたるをくはしからんの杜撰とやいはむ臆説
とやいはまし新撰字鏡巻下ニうぐひすの文字
四つをあげたれどもそのうちに三つは此の文字ニあらずして
鸖乃字なるを笠原玄玫が字彙乃増注玄集ニ字海を引
て鵅鸖春鶯也と見えたるよしいへるハ焦氏筆乗巻六ニ
唐武后字海といひし書ニやおのれいまだ見ざれバ定かならぬ
辨じがたけれどいよ志からんにハ新撰字鏡より古く鸖字は有
しと知べしされど鸖乃字はうぐひすの事とみえざれバ
新撰字鏡ぞかくしるしてある春鳥とかけるも恐らくハ鸖乃字より出たるものなるべしと思はるれど新撰字鏡よりさ
百三十年まへなる天平勝寶五年に撰ばれし萬葉集乃春鳥と
うぐひすとせられたるにて鸖は字より出しものにかさてこの鳥はなく

ゆゑなるが似たりとてやがて黄鳥にはあらざるなる
べしされど廣雅巻十に鸎恠鳥属なりとあれば此あや
しげなれるものゆゑいよいよ久比須其名をおもはしべき
そりにも似げなふしかくてもうぐひすにあらざるとも
いはんやうぐひ須はうぐひすにあらずして事なるのなんよし
なきかしらるの名をおもせばともあらぬべし上其巻
なるか舜擧が黄鳥其寫生とうぐひすと乃寫真とは
あはせ見るに形状いそく異なれをしらばおのばから
古く誤つて傳へしをさせるべしもせなとあるものの
を後の人々まなびは道ひろをしらんとてしひ
てあらぬ唐とりを勘へあてしぞいみじきさかしらなり

けれかしまばうぐひすとは宇久比須とかんなをおぼすし
まるべけれさまど春鳥　春鳥子　鶺　鵜　鶴
鷓をかんもなんなりかれ無しかへまじくも鶯字をばかく
まじこさまざなるを

○鶯異名

直胤云此の異名は悉く前にひけれ書中に出されば再び
載んはくだくしまるざなれど見やすとかしめんとてかさしかく
しれせるなるなりしかはあまでそがうちよしあるを本文に引ざる
もあるはそれは名毎に注して書名をしるせしむ又異名乃うち疑
はしきは○此印を附て後考にとなへ俳諧にのこをちふるは
△此のしるしをして見るに便つきと

鶯
黯 或ハ鵹ニ作ル 鷽ノ作ルハ鷽ノ偽ナリトゾ
黄公
黄鳥
黄雀
粟留
鸝鶲
商庚
黄鵐
皇黄
離黄 或ハ鸂鶒 雛黄 鶺黄 鶺鳥 鵝黄ニ作ル
鸝黄 或ハ鸂黄 鸝鶲 麗黄ノ誤ナラン
倉庚 或ハ鶲鶲ニ作ル
黄粟留 或ハ黄粟流ノ作ル歟
黄鸝留 或ハ黄鸝留又黄離留ニ作ル
黄袍郎
黄伯勞
紅樹歌童
賡詩友
愁胡
水鴉兒
含櫻鳥
鷦
黄袍
黄鶯
黄離 或ハ黄鸝ノ誤ナラン
鸝鶲 或ハ鸝庚ノ誤ナラン
青鳥
鳩鵐
黄鶯
楚雀
摶黍
鵤羽
金梭
舍利

吐天兒
○黄鳩 事物異名録ニ引
れどいふにけん
禽経そのたぐひ多くみえ
事物異名録ニ載てなし出せり
○傳信鳥 事物異名録ニ當
出せれどそれもいかゞ
字彙にもとづきて
おぐらくのせめ
ら字鏡集に出ていぶかれもうぐひすをまで都てかの書ノ
出せる名字疑くしきものゝおほかるを鶺の字を誤てそふ
○澤雉
○鷚鶲
○雜 以上三字
○漱糠鳥 上同
○鸚
○百舌
○廃雀 廃字のぶかけ
まだ多く考へべし
○金衣鳥 書言字考ニ開元遺事を引て出せる
金衣鳥とおなじいりんいらぐひすかべさ
陳藏器が説なれど別鳥なりされど此鳥の異名にまさ
あまでみれどもいまだそれぞ百舌の一名のみを出せ
○宇久比須異名
宇久比須 春鳥 鶺
春鳥子
鷚 蒿見鳥
みそさゞい鳥 老うぐひすと
なづくるもの
○むくどり 枕草子にうぐひすの老るとぞ
後人の考へあまべいうぐひすの
○三月すゝ鳥 藻塩草にうぐひすの
ふるせぜなどかけり

国立国会図書館　タイトル『宇久比須考 2巻』 請求記号 特1-913
ガラス使用

○百千鳥　八雲御抄奥儀抄などにもそえ出せるごとくいくさ百千鳥考と見て知べし

○なきぬ〳〵鳥　枝折萩本の名いまだ出所をかうがへず

○とゝめ鳥　異名分類より色葉和難抄を引て出をり直胤按もとゝ

△歌よみ鳥　増山の井　△経よみ鳥　上同

△歌童　俳諧三餘抄是ハ鶯のかへるをいふ　△きゝこ鳥　俳諧通俗志　△歌舌　上同

歌よみ鳥より已下いづれも俳諧者流のたはぶれ名にて古へ歌にもよまず又雅言にも用ひざる事なれば今さら論ずるにも及ばざれども近頃俳諧流行して世の人是等の名をもて歌よむ事と心得誤れるもの多きゆゑ一言して其非を示すのみ

○喚子鳥　津守國夏等が説よりおこりて出せどおぼつかなき事なり

○百千鳥　八雲御抄奥儀抄などにもそえ出せるごとくいくさ百千鳥考と見て知べし

○なきぬ〳〵鳥　枝折萩本の名いまだ出所をかうがへず

○とゝめ鳥　異名分類より色葉和難抄を引て出をり直胤按もとゝ

△歌よみ鳥　増山の井　△経よみ鳥　上同

△歌童　俳諧三餘抄是ハ鶯のかへるをいふ　△きゝこ鳥　俳諧通俗志　△歌舌　上同

歌よみ鳥より已下いづれも俳諧者流のたはぶれ名にて古へ歌にもよまず又雅言にも用ひざる事なれば今さら論ずるにも及ばざれども近頃俳諧流行して世の人是等の名をもて歌よむ事と心得誤れるもの多きゆゑ一言して其非を示すのみ

直胤又ふらく鶯異名のうち搏黍の字おほつかなき事なり

陸機が疏と引く搏よ作まるハ康熙字典のごとく悉く原本の字體にもとづきまハ姑く字典まで效へる

宇久比須考巻下終

千葉直胤先生著述目録

日本類函　全部千巻　十冊ヅヽ追々出版

カラ國ニハ唐類函藝文類聚類聚合璧事文類聚山堂肆考三才圖會潛確類書天中記淵鑑類函ノタグヒモ天象地儀ヲ初テヨロヅノ事共ヲ載タル書牟テカゾフベカラズ　皇國ニハサル書ナキコヲ年ゴロ愁ラルヽノアマリカヽル書ヲ編輯レタランニハナニクレト捜索スルニ數百部ノ書ヲクル勞ナク實ニ國学ノ至寶ニテ学者ノ便リナラテ草稿ナカバ成レルハ文化ノ初ナリキソモ〳〵淵鑑類函ハ勅撰ニテ輯者淨書校正トモニアマタナルヲ是ハ一人ニテ數千部ノ書ヨリ撰ヒ出ルコトスラカタカルニイハンヤ抄出按訂ノタヤスカラザルヲヤ或ハ倦ジ或ハ暇ナク久シク中絶テ空ク星霜ヲ経ルコト三十年草本徒ニ白魚ノスミカト成シヲヒタスラコフニヨリテ再ビ編集セラル、吏トハナリヌコハ引所ノ書原本ノマヽヲ挙テ悉ク巻數ヲモ記サレツレバ此一本ニテ數千部ノ書座右ニ有ガ如ク又本書ニツキテ見ンモ煩ハシカラズマコトニ數千部ノ書ヲ一時ニツヅヘテサナガラ本書ヲマノアタリミルニヒトシク實ニ國学ノ捷徑ニテヒトタビヨム者博識ノ聞エヲエンコト此書ニマサルモノアルベカラズ凡カヽル大部ノ書一人貞主ガ秘府畧ノミナラド早ウヒデテ世ニ傳ハラズサレバ此書　皇國第一ノ大部ト云ベク全部刻成ニハ偉ナルイサヲトイフベシ

書林　謹白

特1 宗 913

天保十二辛丑年正月發兌

日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛

江戸書林 同通壹丁目 須原屋茂兵衛版

存古堂日抄 初編 二巻 此書ハ日毎ノ讀書ヨリナニクレト抄録セラルヽニソガウチ未發ノ説ノミヲヌキ出ラレタル隨筆ナリ

百千鳥考 全部 一巻 此書ハ百千鳥ノカウガヘヲ詳ニ載テウグヒス考ニ残レル説ドモヲ挙ラレタレバ宇久比須考ヲ見ン人カナラズ見給フベシ

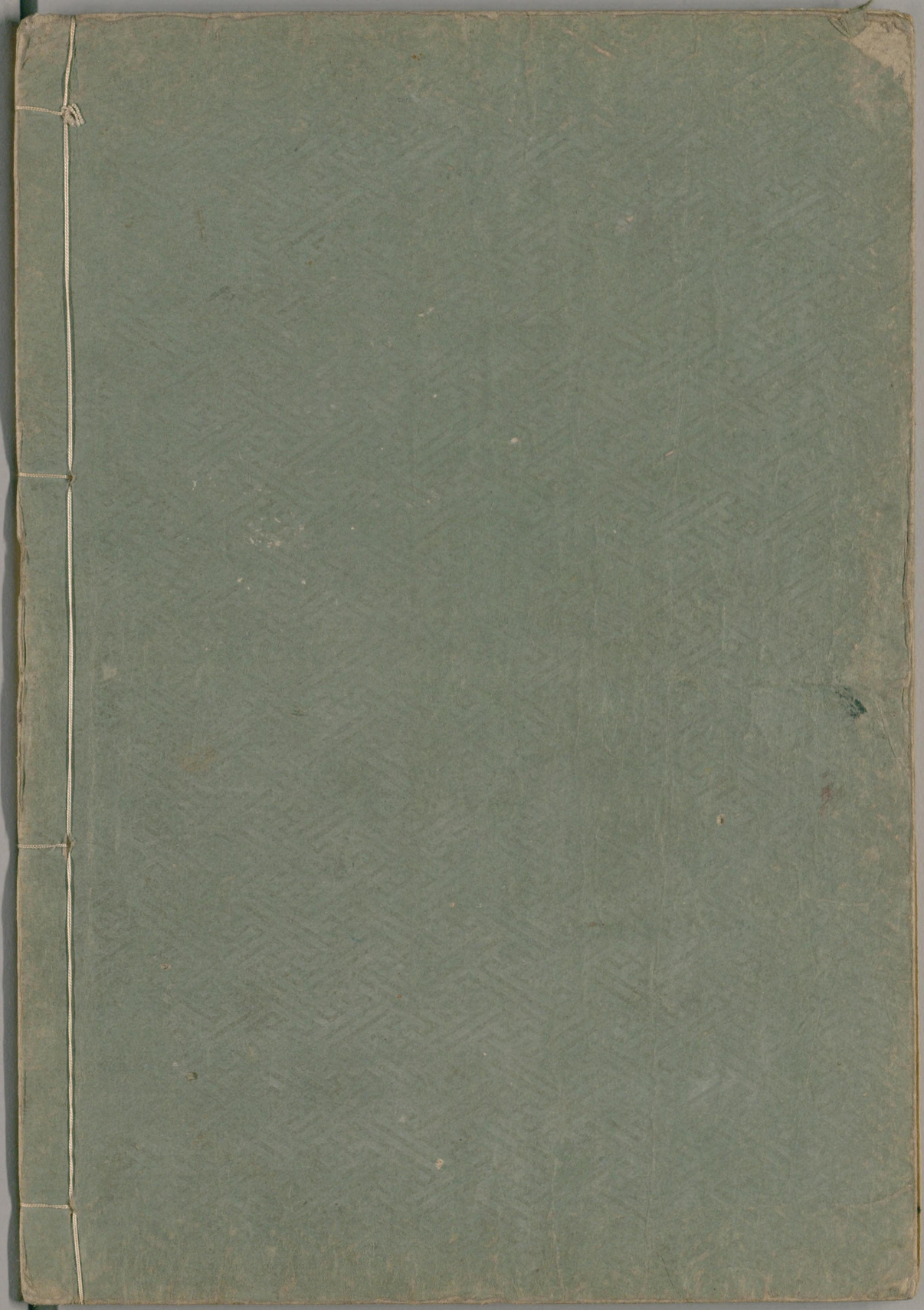
博壽選 全部 一巻 松竹亀鶴ノ外千代万代ノ齢ヒ長キモノヲカル ヲ悉ク撰ビテ記サレタル書ナリ

今言梯 全部 一巻 是ハ今假字ヲ委シク挙テ專ラ勤仕ニ便リナラシム

聲音便覽 全部 三巻 凡聲音ノ事ヲカケルモノナシ此書ハ是ニ拘レルコトハ漏サズアマタノ引書巻丁ノ數ヲモクハシク記サレツレバ歌ヲ詠文ヲツクラニハ甚益アルコト多シ

人物名林 全部 五巻 此書ハイロハニワケテ捜索ノ一助トスタトヘバ武内大臣ヲミント思ハバタノ部ヲ見レバ日本紀水鏡神皇正統記愚管抄公卿補任新撰姓氏録皇統紹運録トアルガ如ク凡傳アルモノハ漏サズ群書ヲ探索ノ煩ヒナレモト羣書ノ見ダシニ備ントテ撰レタレバ國学家ハ机上ヲハナツマジキ書ナリ

国立国会図書館　タイトル『宇久比須考 2巻』　請求記号 特1-913　ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『宇久比須考 2巻』 請求記号 特1-913

ガラス使用